

標 題： The Diet and 15-Year Death Rate in the Seven Countries Study
7 ヲ国研究における食事と15年間の死亡率

著 者： A. Kyes, et al. (米国 ミネソタ大学 公衆衛生学部 疫学科)

掲 載 誌： Am. J. Epidemiol. 126: 903-915 (1986)

要 旨： 40-59歳で開始時に「健康な」男性11,579人から構成される7 ヲ国研究の15コホートで、15年間に2,288人が死亡した。
死亡率はコホート間で異なった。

平均年齢、血圧、血清コレステロール、および喫煙習慣の違いが、総死亡率の相違の46%、冠状動脈性心疾患による死亡率の相違の80%、癌による死亡率の相違の35%、そして脳卒中による死亡率の相違の45%を「説明」した。

死亡率の相違は、平均相対体重、肥満、および運動と関連しなかった。

コホートは平均の食事が異なった。

死亡率は、飽和脂肪酸からの食事エネルギー平均パーセントと正の関連をし、1価不飽和脂肪酸からの食事エネルギーパーセントと負の関連をしたが、多価不飽和脂肪酸、タンパク質、炭水化物、およびアルコールからの食事エネルギーパーセントとは関連しなかった。

全ての死亡率は1価不飽和：飽和の脂肪酸比と負の関連をした。

その比に、年齢、血圧、血清コレステロール、および喫煙習慣を独立変数として含めると、総死亡率の相違の85%、冠状動脈性心疾患による死亡率の相違の96%、癌による死亡率の相違の55%、および脳卒中による死亡率の相違の66%を説明した。

オレイン酸が1価不飽和脂肪酸のほぼ全てのコホート間の相違を説明した。

オリーブ油を主な油脂とするコホートで、総死亡率および冠状動脈性心疾患による死亡率が低かった。

因果関係を主張しないけれども、リスクの評価で住民および住民中の個人の特徴を考慮するように要請する。

キーワード： 冠状動脈性疾患、死亡率、腫瘍、オレイン酸、住民(populations)
